

国語力を 身につける

今年二月に発表された中央教育審議会の審議経過報告には、「国語力の育成」が大きく謳われています。PISA調査の読解力において低下傾向が見られることも踏まえ、漢字の読み書きなどの知識・技能の定着とともに、思考力・表現力等の育成が、これからの課題として掲げられています。

審議経過報告の中には、「言葉は、『確かな学力』を形成する基盤」であり、「国語力の育成」は、「国語科を中核としながらも、国語科以外の教科等と連携して、すべての教育活動を通じて」重視することが求められると記されています。

今回の特集は二部構成として、「国語力を身につける」を取り上げました。第一部では、三人の先生方に、それぞれの立場から、「いま必要な『国語力』とは何か」について提言をいただきました。さらに第二部では、これから求められる国語力育成のあり方として、「教科を超えた学習の場で『国語力』を身につける」試みの実践提案を掲載しました。

子どもたちのために何をすべきか、これをきっかけに、先生方とともに考えていくことができればと願います。



語彙と論理と 吟味の力

早稲田大学教育学部教授 安彦 忠彦

「国語の力」というと、国語教育関係の方は、言語能力とともに必ず読解能力、それも人間の心情の読み取りや、作品や作者の意図を汲み取り、鑑賞する能力としての道徳的・芸術的情操の育成をあげる人が多い。なぜ、そうなのだろうか。

どこの国も、国語という教科によって、何ほどか「国民的教養としての道徳的情操」を育てようとする。日本の国語科だけが例外ではない。けれども、欧米の主要国では、それとともに、きちんとした言語能力を育てるために、別に「言語技術科」という種類の教育の場をもっている。日本には、過去十年ほどはその種の教育が必要だとする声が高まっているが、教育行政を経て学校の中には入ってきていない。そのため、その種の実践が増えていても、個々の教師の個人的な試みとしていくつも見られるだけで、学校の公式の教科目に具体化されていない。むしろ、そのような現状を見て、有志が学校の外で種々の実践や研究の場を増やしている。(例…三森ゆりか氏の「つくば言語技術教育研究所」など)

まず、最近の大人がすでに「語彙の数」が少ない。漫画やテレビ等のメディアによる影響もあるが、図や画像、映像での表現が増えて、文字による言語表現は一部の愛好者以外は非常に減っている。それが最もよく分かるのが携帯電話やインターネットのメールである。それも簡潔で正確な表現というよりも、記号や絵や画像で彩られた、第三者には分からないような暗号文のようなものが大部分であり、「誰にでも正確に分ち伝えられる」文字言語の基本性格を逸脱したものが多く、標準的な語彙に無関心である。

これに伴って、論理的な思考や表現を一層求められる時代や社会であるのに、逆に個人的な関係の思考や表現で、閉じた人間関係や社会、コミュニケーションをつくりあげようとしがちなのが日本人の現状であろう。それで済んでしまう日本という国ないしは日本人という国民の、地理的・歴史的条件も無視できないが、これからはそれでは到底済まない時代に入っていく。あらゆる問題が、地球的規模・人類的規模で考えられねばならなくなってくる。そうであれば、すべての国の人に分かるような論理的な思考や表現を心がけねばならないであろう。もっと子どもたちの視野を国外にまで広げなくてはならない。

さらに、言語はコミュニケーションの道具であるが、その際、人を一定の行動へ動かすように用いられる宣伝や思想教化の道具でもある。多くの政治的な役割を負っている人の発言は、基本的にそのような性格を帯びる。したがって、聴く者は、その人の言葉を「吟味」にかけ、表面上の意味以外の別の意図は何であるかについて、明晰な論理で問題点を指摘・批判し、その種の言葉に惑わされないような鋭い読みのできる力を持たなければならぬ。

私自身は、純粋な言語能力をしっかりと育成するために、「語彙と論理と吟味」の能力に焦点を当てた国語教育が必要だと考えている。一部の人から、国語教育を「文学教育」と「言語教育」に分けよ、との主張が出されているが、私も似た方向で考えている。いわゆる「文学教材」による心情の読み取りなどは、一種の芸術鑑賞の仕方を知ることであり、それを一つの答えでまとめようとすること自体、よほど丁寧な、文芸批評的な学習を通すことなしには、かえって国語の教育が成り立たなくなる心配がある。道徳教材の読み取りと何ら変わらないものになる可能性がある。むしろ、文芸批評の方法的な学習によって、教材の読後の鑑賞自体は学習者各自に任されてよい。向山洋一氏の「分析批評」による読解は、その種のものの典型であると言える。

今日の子ども・青年の国語の力を、現代という地球社会的な観点から見れば、国の内外の誰とでもコミュニケーションがとれる読み、書き、話す能力が求められており、その意味では、語彙力や、論理的な思考力と表現力を伴う読み書き・話す聞く能力を、系統的・体系的に育てなければならぬ。その際、最も大切なことは、テレビ等のジャーナリズムのもつ情報操作に対して、それを吟味し、批判し、そして正していこうとする態度と能力を、教育目標として示さねばならない。そうでなければ、簡単にジャーナリズムに乗せられ、ただ書かれていることをそのまま読むだけの人形のように、主体的な判断能力を欠いた人間が育つであろう。それでは社会に追隨する者は増えても、社会をより望ましいものに変えていく者は容易には現れない。そんな教育でよいとは思えない。

ればならない。最近、欧米で盛んになりつつある「メディア・リテラシー」の能力とはそのようなものを含んでいる。日本の国語教育は、もっとこのような部分に力を入れたものにならないければ、今後の国語教育の真価が問われることになる。まずは大人の自覚が求められよう。

最後に、あらためて「語彙」の数に立ち戻り、別の面からその重要性について触れておきたい。それは、言語が思考の道具であり、コミュニケーションの道具であるとともに、実は「人間の内面的世界の構成素材」でもある、ということである。この素材たる言語が数多く記憶されていれば、その人の内面的世界も豊かで彩りのあるものとなり、何かを表現するときに、その豊かな語彙の中からよりの確で多様な言語が選ばれよう。それは、その人の心が、そのような言語によって構成されており、より多くの選択肢の中から、その人の精神世界を表現する素材を得ることができからである。語彙を多く記憶することを馬鹿にしてはならない。語句や文章の暗唱についても同様のことが言える。軽んじてはならない。



安彦 忠彦 (あびこ ただひこ)
1942年、東京都生まれ。早稲田大学教育学部教授。中等教育課程(中等カリキュラム)論を中心に、教育方法や教育評価が専門。現在、文部科学省中央教育審議会委員を務める。日本カリキュラム学会代表理事、日本教育方法学会理事、日本教育技術学会理事などを歴任。『新学力観と基礎学力』『カリキュラム開発で進める学校改革』(明治図書)ほか著書多数。